わが市を語る 1

大仙市（秋田県）

大仙市長　老松博行

『人が活き 人が集う 夢のある 田園交流都市だいせん』

はじめに

平成29年7月下旬、大仙市はこれまで経験したことのない豪雨に見舞われました。大量の雨は瞬く間に河川を氾濫させ、家屋の浸水、田畑の冠水、道路の損壊など大きな爪痕を残しました。改めて自然の脅威を思い知らされた災害でありました。この災害に際し、全国から多くのお見舞いと励ましの声をいただきました。この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。皆さまの応援を力に変えて一日も早い完全復旧を目指してまいります。

市の概要
～地域資源に恵まれた田園交流都市～

本市は、秋田県内陸南部に位置し、秋田新幹線や秋田自動車道などの高速交通体系が整備された交通の要衝であり、四季折々に美しい表情を見せる自然豊かな田園都市であります。

また、日本最高峰の花火大会の一つ全国花火競技大会「大曲の花火」や国指定重要無形民俗文化財「刈和野の大綱引き」などの伝統行事、国指定史跡「払田柵跡」や国指定名勝「旧池田氏庭園」、国宝「線刻千手観音等鏡像」などの史跡・文化財、優れた農産物、味わい豊かな地酒、特色ある温泉など多くの地域資源に恵まれています。

毎月花火が打ち上がるまち大仙

本市は毎月花火が打ち上がる「花火のまち」です。一晩で70万人の集客を誇り、日本屈指の技術と伝統を持つ夏の「大曲の花火」のほか、新年の幕開けを飾るカウントダウン花火、若手花火師が新作花火を披露する「新作花火コレクション　大曲の花火－冬の章－」、桜と花火のコラボレーションが楽しめる「余目さくら花火観賞会」、世界の花火と日本の花火が競演する「大曲の花火－春の章－」、地酒とともに花火を楽しむ「楢岡さなぶり酒花火」、劇場型エンターテイメント花火「大曲の花火－秋の章－」など、市内各地で花火大会が開催されています。また、本市では、結婚式や記念行事などさまざまな場面でも花火が打ち上げられており、伝統文化・芸術として市民の皆さまから広く親しまれています。

本市ではこの「花火」を核に地方創生の一環として地域の活性化を目指す「花火産業構想」を進めています。平成29年にはこの構想に基づいた新たな花火工場の操業開始や「国際花火シンポジウム」の開催などが実現し、本年も施策の目玉の一つ「花火伝統文化継承資料館〝はなび・アム〟」が8月にオープンいたします。4K4面花火シアターや貴重な花火資料の展示ブースの設置を予定しており、日本の花火文化の素晴らしさを広く国内外に発信したいと思っている

毎年8月最終土曜日開催の全国花火競技大会「大曲の花火」

ます。毎月打ち上がる花火とともに、多くの皆さまから親しんでいただきたいと思います。

地域に根ざしたキャリア教育
～「大仙ふるさと博士育成」事業～

本市では、子どもたちが自ら地域へ飛び出し、地域の〝ひと・もの・こと〟にかかわる機会を通してふるさとへの愛着心を高め、ふるさとの未来を担う人材を育成することを狙いとした「大仙ふるさと博士育成」事業を実施しています。

小学3年生から中学3年生までの児童生徒を対象に、市内企業の見学や地域行事などに参加した場合、その参画度合いによってポイントを付与する仕組みで、10ポイントで初級、30ポイントで中級、60ポイントで上級、100ポイントで名誉博士に認定されます。平成28年7月にスタートした取り組みですが、平成30年3月現在で、初級2386名、中級363名、上級10名、名誉博士3名のふるさと博士が誕生しています。

「未来の創り手」となる子どもたちをはぐくむためには、学校や家庭だけでなく、地域や企業と共に社会全体とのつながりを重視した教育を行っていく必要があると考えております。子どもたちがふるさとで活躍する〝人財〟に大きく育ってくれることを願い、今後もこうした「地域に根ざしたキャリア教育」の充実を図ってまいりたいと考えています。

全県500歳野球大会～親父たちの甲子園～　約4000人の選手による入場行進

結びに

日本全体が人口減少局面を迎え、自治体にはこれまで以上に地域活力の源泉となる産業の育成・振興、都市としての個性や魅力づくりが求められています。

本市といたしましても、こうした喫緊の課題をしっかりと受け止め、先人から託された貴重な遺産や自然の恵みを次世代へ継承しながら、持続可能な魅力あるまちづくり、誰もが安心して暮らせるまちの創造に取り組んでおります。

今後も、市民の皆さまが大仙市に誇りと愛着を持ち、大仙市に「生まれて良かった」「住み続けて良かった」「訪れて良かった」と実感していただけるよう、そして、本市のみならず、秋田県、東北、日本全体に元気をお届けする「大輪の花火」のような活力溢れるまちになれるよう、さまざまな取り組みにチャレンジしてまいります。引き続き、皆さまからの温かいご支援をよろしくお願いいたします。

プロフィール

◆**面積**　866・77㎢
◆**人口**　8万2910人
◆**世帯数**　3万1355世帯

〔将来都市像〕人が活き　人が集う
夢のある　田園交流都市　～こころをつなぎ　希望にみちた未来の創造へ～

〔まちの特徴〕東に奥羽山脈、西に出羽丘陵、その間を南から北に流れる雄物川と東から西に流れる玉川を軸として仙北平野が広がる肥沃な穀倉地帯

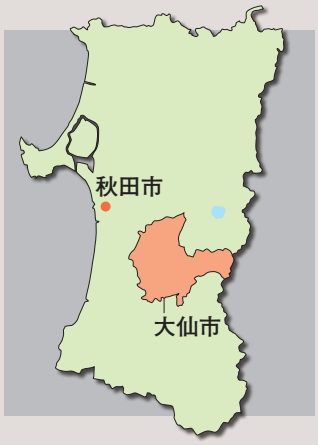
〔市町村合併〕平成17年3月22日に大曲市、神岡町、西仙北町、中仙町、協和町、南外村、仙北町、太田町が合併

〔特産品〕あきたこまち米、地酒（刈穂、出羽鶴、秀よし、福乃友、金紋秋田、千代緑）、いぶりがっこ、枝豆、杜仲豚、焼き岩魚寿し

〔観光〕旧池田氏庭園、真木真昼県立自然公園、まほろば唐松「能楽殿」、払田柵跡

〔イベント〕全国花火競技大会「大曲の花火」、大曲の花火～春の章・秋の章・冬の章～、刈和野の大綱引き、川を渡るぼんでん、ドンパン祭り、全国500歳野球大会、全県500歳野球大会、太田の火まつり、彩夏せんぼく、秋田おばこ節全国大会、秋田飴売り節全国大会、秋田おはら節全国大会、南外小唄まつり、定期能公演

大仙市長
老松博行



※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

わが市を語る 2

古河市（茨城県）

古河市長　針谷　力

『華のある都市古河』市民と共に未来に誇れるまちづくり

歴史と文化を礎に新たな時代へ

古河市は茨城県の西端、埼玉、栃木、群馬との県境にあり、関東地方のほぼ中央に位置しています。都心からは50～60㎞圏にあります。

「万葉集」にその名が見られるなど歴史は古く、室町時代の一時期には古河公方が置かれ、関東の政治の中心地でもありました。また、江戸時代には古河藩の城下町として、さらに日光街道の宿場町として発展してきました。明治・大正期は製糸業で栄え、戦後はJR線の電化や広域道路網の整備が図られ、都心方面へのアクセス向上によって首都近郊の都市として発展してきました。

歴史の趣を残す町並み

平成17年9月に商業・工業・農業にそれぞれ特色を持った1市2町が合併して古河市として再スタート、現在、市町合併12年の成果を土台に、本市が有している立地特性や地域資源を生かしながら、未来を見据えた都市づくりを進めています。

まちづくりの課題

本市の人口（国勢調査）は、平成12年の約14万6000人をピークに減少局面に突入し、直近の平成27年は約14万1000人でした。国立社会保障・人口問題研究所による将来人口の推計では、このまま何も対策を講じなければ、平成72年には約8万1000人になるものと予測されています。言うまでもなく、人口減少の最大の要因は、少子高齢化の進行です。

人口減少の影響は、市税の減少をはじめ、行政サービス水準の維持困難、住民負担の増加、地域経済の活力低下、地域コミュニティ機能の低下、伝統文化の継承困難などさまざまであり、ひいては都市の存続にも多大な影響を及ぼします。また、少子高齢化の最大の問題点は、労働力の中核をなす15歳から64歳までの生産年齢人口が減少することにあり、都市の活力に多大な影響を及ぼします。

そこで本市では、確実に進行する人口減少の中で、生産年齢人口の急激な減少に歯止めを掛けていく政策の重要性を強く認識しています。

まちづくりの方針

人口減少は〝静かなる危機〟と呼ばれるように日々の生活では実感しづらいと言われています。本市では、こうした危機感に立って長期的な視点から、人口流出の抑制や流入の促進、人口構造の転換に向けた「積極戦略」、並びに人口減少に対応したまちづくりを行う「調整戦略」を同時に展開していきます。

このことで、人口減少の中でも極力、都市の活力維持や地域経済の活性化に取り組み、都市の輝きを維持していきたいと考えています。

未来に誇れるまちづくり

本市では、この対応として、次

の3つの施策を戦略的に進めていきます。

安定した雇用の創出

元気を生み出す産業の振興を通じて、雇用の創出や拡大を目指します。首都圏中央連絡自動車道の開通効果や日野自動車古河工場の立地効果、地域資源の発掘と有効活用、交流人口の増加を「戦略視点」として、新たな企業誘致、古河ブランドの発掘とプロモーションの強化、体験・参加型の観光ツーリズムなどの推進に取り組みます。

若い世代の定住促進

若い世代は都市の活力そのものであり、市に呼び込み、つなぎとめる必要があります。子育ての安心安全、確かな学力と体験の中で豊かな感性をはぐくむ教育、郷土愛の醸成を「戦略視点」として、切れ目のない子育て支援、小児科・産婦人科医療体制の充実、子育て世帯への経済的支援、特色ある学校教育、古河っ子の育成などに取り組みます。

日本一の花桃の里「古河公方公園（古河総合公園）」

まちの安心安全

そもそも住む場所が安全な所でなくては、移住・定住も期待できません。本市は利根川、渡良瀬川という大河川に面していることから、過去には水害に見舞われてきた歴史があります。

水害への対策強化、地域防災力の向上、地域コミュニティの機能維持、消防力の強化を「戦略視点」として、水防計画による活動、防災啓発や避難計画の周知、自主防災組織の育成、密集市街地への消防施設の設置、消防活動を助ける生活道路の整備等に取り組みます。

おわりに

上記で述べた3つの戦略的施策のみで、まちづくりの目標が達成できるわけではありません。若い世代の移住・定住を促進していくという点では、都市のエンターテイメント性を高めていく取り組みも大変重要と考えます。さらに言えば、今住んでいる人々が住み続けたいという都市（まち）でなければ、その移住・定住も期待できません。

その意味においては、古河市という都市の魅力そのものをグレードアップさせていく取り組みが必要です。

今後とも、市民と共に未来に誇れるまちづくりを基本姿勢として、都市の未来像〝華のある都市（まち）古河〟の実現に向け、まちづくりを推進していきます。

北西部に広がる渡良瀬遊水地（ラムサール条約登録湿地）

プロフィール

◆**面積** 123・58㎢
◆**人口** 14万4466人
◆**世帯数** 6万908世帯

〔将来都市像〕『華のある都市（まち）古河』～はなが好き、ひとが好き、古河が大好き～

〔まちの特徴〕関東平野のほぼ中央に位置し、生活・生産・流通の場に恵まれた、ポテンシャルの高いまち

〔市町村合併〕平成17年9月12日、古河市、総和町、三和町が対等合併

〔特産品〕茨城県銘柄産地に指定されているバラ、にんじん、サニーレタス、ニガウリ

〔観光〕ネーブルパーク、古河公方公園（古河総合公園）、古河市三和ふるさとの森、古河歴史博物館、古河文学館、篆刻美術館

〔イベント〕古河桃まつり、古河花火大会、夢あんどんと夕涼み、古河関東ド・マンナカ祭り、古河菊まつり、古河提灯もみまつり

古河市長
針谷　力

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

わが市を語る 3

住みたいまち 誇れるまち 新しいせと

瀬戸市（愛知県）

瀬戸市長　伊藤保徳（いとうやすのり）

せとものまちとして発展

「せともの」という言葉をよく聞かれると思いますが、「せとものまち瀬戸市」がどこにあるかご存じでしょうか。よく「瀬戸内海にある」と誤解されますが、わがまち「瀬戸市」は、愛知県名古屋市の北東約20㎞にあります。

窯道具を積み上げて作った、約400mに及ぶ「窯垣の小径」

「せともの（瀬戸物）」という言葉は、やきものの代名詞で、本市は、良質で豊富な陶土に恵まれて発展してきました。

現在は、長年受け継がれてきたやきものづくりの卓越した技が、多種多様なやきものづくりにつながり、陶器と磁器が共存する稀有（けう）な産地であるだけでなく、ノベルティ（置物・装飾品）、ファインセラミックスなども生産され、今もなお新しいモノづくりが続けられているまちです。

住みたいまちに向けて

本市では、平成29年度から「第6次瀬戸市総合計画」に基づく新しいまちづくりをスタートしました。やきものの歴史、文化があることに加え、多くの人や企業にとって住みたい・住み続けたい、活動したい・活動を続けたいと思っていただけるまちとなることを目指しております。そのために総合計画で、経済活動の活性化、子ども・子育て支援の充実、地域の支え合いの強化の視点からの都市像を設定して「住みたいまち」となるよう取り組みを始めております。

誇れるまちに向けて

本市では、市の持つ特色や魅力を再確認し、市民の誇りを醸成していこうと「せとまちブランディング」と銘打って、市をアピールする取り組みを行っておりますが、平成29年は追い風となる大きな出来事がありました。

1つ目は、六古窯のまちの1つとして「日本遺産」に認定登録されたことです。日本遺産とは、地域の歴史的魅力や特色を通じてわが国の文化・伝統を語る「ストーリー」を文化庁が認定するものです。六古窯とは、日本の中世期に陶磁器生産を開始し、現在まで脈々とやきものづくりが続く陶器産地という基準で選ばれた6カ所の窯業地であり、本市を含め、常滑・信楽・丹波・備前・越前があります。この六古窯の産地が提唱する「きっと恋する六古窯―日本生ま

瀬戸市在住の棋士 藤井聡太さん

れの日本育ちのやきもの産地―」のストーリーが日本遺産に認定されました。本市では改めて「せともの」の歴史や文化をまちの魅力として「文化の物語」を観光施策の中心に据えて、新しい視点でのPRに努めております。

2つ目は、平成29年、本市在住の棋士藤井聡太さんが公式戦29連勝を達成し、歴代新記録を樹立したことです。その後も勝利を重ね、本年2月には、第11回朝日杯将棋オープン戦で優勝し、さらに3月には、平成29年度の「対局数」「勝数」「勝率」「連勝」の4部門における1位を独占し、「記録4冠」の最年少記録を成し遂げました。

対局があるたびに、新聞やテレビで「愛知県瀬戸市の棋士」として紹介されており、全市を挙げて活躍を応援しております。

新しいせとに向けて

「新しいせと」づくりへの1つ目の取り組みとして、「市全域における小中一貫教育の導入とモデル地区における小中一貫校の整備」を進めております。

この取り組みでは、未来を担う次世代のための教育環境を整えるため、今後、市全域において、小中一貫教育を推進していくこととしております。小中学校の9年間を見通した教育目標やカリキュラムを編成し、それぞれの学校や地域の特色などを生かした教育活動を展開していきます。

また、モデル地区においては、教育環境の向上と児童生徒数の減少による課題解決などに向け、都市公園の敷地を活用しながら7つの小中学校（中学校2校・小学校5校）を統合し、平成32年4月の小中一貫校の開校に向け、整備を行っております。

この小中一貫校の基本コンセプトは「出会いと協働による新たな学び合いの創造―地域とともに歩む未来の学び舎―」です。

2つ目の取り組みとして、「協働のまちづくり」のさらなる進展を目指しております。

今後、人口や税収が減少していく中で、持続可能な都市としてあり続けるためには、市民の協力・支え合いが必要不可欠です。市民と市役所職員が課題を共有し連携しながら、それぞれの力を最大限に生かし、同じ目的に向かって協働することにより「住みたいまち誇れるまち」をつくりあげていきたいと考えております。

平成32年開校予定の小中一貫校イメージパース

プロフィール

瀬戸市長
伊藤保徳

◆**面積** 111・40㎢
◆**人口** 13万47人
◆**世帯数** 5万5277世帯

〔将来像〕「住みたいまち　誇れるまち　新しいせと」

〔都市像〕「活力ある地域経済と豊かな暮らしが実感できるまち」「安心して子育てができ、子供が健やかに育つまち」「地域に住まう市民が自立し支え合い、笑顔あふれるまち」

〔まちの特徴〕1000年以上の歴史を誇る せとものの まち 陶都・瀬戸

〔特産品〕陶器、磁器、セラミックス、セトノベルティ

〔観光〕定光寺公園、岩屋堂公園、窯垣の小径

〔イベント〕せと陶祖まつり（4月）、せともの祭（9月）、来る福招き猫まつり（9月）

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、
人口・世帯数は平成30年3月1日現在の「住民基本台帳」による。

わが市を語る 4

川と人とまちの未来

直方市（福岡県）

直方市長　壬生隆明（みぶたかあき）

筑豊炭田の繁栄と遠賀川

直方市は、福岡県の北部に位置する人口5万7000人余りのハート型をした街であり、かつて、筑豊炭田が繁栄し、日本の近代化のエネルギー生産を牽引（けんいん）していた時代には、その物流の中心となった都市でありました。

この街では、筑豊地域を南北に流れる2つの大きな河川が合流し、遠賀川となって河口に流れ、響灘（ひびきなだ）の海洋に入っていきます。遠賀川の流域には、縄文・弥生時代から人が定住し、多くの恵みをもたらしてきました。そして、近代になって、この川は、筑豊炭田の繁栄の礎となりました。直方市史では、この川の果たした役割を次のように記しています。「もし、遠賀川の水運がなかったならば、筑豊炭田の開発と発展はかなり遅れたであろうことは容易に推察されるところである。かつて炭鉱の全盛時代の筑豊の地図を一見すれば明らかなように、筑豊の炭山は、遠賀川水系の本支流の流域にくまなく分布している。遠賀川を大樹にたとえれば、炭鉱は、幹をはじめ枝もたわむほどに実った果実といえる。」（直方市史・補巻・石炭鉱業編308ページ）。

市の中心を流れる遠賀川と川東に望む福智山

遠賀川水辺館を拠点とした直方川づくり交流会

現在、幹も枝もたわむほどの果実は失われました。しかし、遠賀川の大樹は、かつての炭鉱とは違う果実をはぐくんでいます。それは、遠賀川を舞台にした川づくりと人づくりとまちづくりです。この活動の中心となっているのが「直方川づくり交流会」です。この会は、平成8年に発足し、「川づくりは人づくり、人づくりはまちづくり」をテーマに定例会を積み重ね、市民と行政が一緒に考えながら活動しています。折しも、平成9年に河川法が改正されて河川法の目的である「治水」「利水」に「環境」が加えられ、川づくりに住民の声を反映する動きが加速されました。さらに、平成16年には、国土交通省によって同省遠賀川河川事務所の隣接地に「遠賀川水辺館」が建設されて会議室や多目的ホールが整備され、これと相前後して平成15年に「特定非営利活動法人直方川づくりの会」が設立され、以後、遠賀川水辺館を拠点施設として体験学習や定例会や講演会などが開催されるようになり、会の活動がより積極的に展開されていきました。

川づくり交流会の活動拠点施設「遠賀川水辺館」

そして、会の活動の重要なテーマである次世代の子どもたちの育成に対する取り組みも活発化していきました。まず、平成11年から小学生を対象としたリバーチャレ

ンジスクールが開始され、平成16年には学校の垣根を越えた中高生による水や自然に関する情報交換サークルＹＮＨＣ（Youth Natural History Club・青少年博物学会）が発足して活動を開始し、平成17年には小学生の活動母体となるめだかの学校が発足して活動を開始し、平成19年には大学生らの災害時の復興支援ボランティア組織であるＪＯＣ（Joint Of College）が発足して活動を開始し、平成20年には6歳未満の子どもたちと保護者を対象とした自然体験活動キッズＬＮＣ（Little Nature Club）が発足して活動を開始し、平成22年には大学生の河川・環境ボランティアであるＳＷＥＥＰが発足して活動を開始しています。こうした活動を通して、子どもたちは、遠賀川や水のあり方や環境について学んでいます。

次世代をはぐくむ遠賀川

このように次世代の子どもたちに対する多様な取り組みの中で、とりわけ特筆すべきことは、世界水フォーラムへの子どもたちの参加であります。世界水フォーラムは、深刻化する世界の水問題を解決するために市民、行政、学識者が集まり、3年に一度開催される水分野の世界最大の国際会議であり、平成9年に第1回大会がモロッコ（マラムシュ）で開催され、以後第2回オランダ（平成12年・ハーグ）、第3回日本（平成15年・京都）、第4回メキシコ（平成18年・メキシコシティ）、第5回トルコ（平成21年・イスタンブール）、第6回フランス（平成24年・マルセイユ）、第7回韓国（平成27年・テグ）で開催され、今年（平成30年）の第8回はブラジル（ブラジリア）で開催されます。世界子ども水フォーラムは、世界水フォーラムの分科会の1つであり、次世代を担う子どもたちに世界的な水危機について真剣に考えてもらうと同時に人材育成を目的として開催されるものであり、日本で開催された第3回世界水フォーラムにおいて第1回世界子ども水フォーラムが開催され、今年で第6回目の開催となります。日本からは、前述のＹＮＨＣ（青少年博物学会）で活動している子どもたちが唯一参加し、毎回その活動内容を英語で報告し、世界中の子どもたちと交流し、国際的な会議でも物怖じすることなく自らをアピールし、活動できる若者として成長しています。今年のブラジルでの世界水フォーラムにも3人の若者たちが出席し、自らの活動内容を報告することになっています。

私は、筑豊炭田という豊かな果実をはぐくんだ遠賀川という大樹が、今なお滔々（とうとう）と流れ、人づくりという新たな果実を豊かに実らせてくれていることに感謝するとともに、この世界に羽ばたく子どもたちの姿にこそ、このまちの未来があると確信しています。

平成24年3月開催「第6回世界水フォーラムinフランス マルセイユ」

プロフィール

◆**面積**　61・76㎢
◆**人口**　5万7082人
◆**世帯数**　2万6926世帯

〔将来都市像〕市民一人ひとりが輝き笑顔つながるまち

〔まちの特徴〕緑豊かな福智山と南北に流れる遠賀川と彦山川に代表される美しい自然に恵まれた水と緑があふれるまち

直方市長
壬生隆明

〔特産品〕成金饅頭、米粉、いちご、高取焼、焼きスパ、カレー焼き、はちみつ、洋ラン、トルコギキョウ

〔観光〕直方市石炭記念館、直方レトロ地区、福智山ろく花公園

〔イベント〕のおがたチューリップフェア（4月）、のおがた夏まつり（7月）、のおがた産業まつり（10～11月）

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。